

邂逅

—光州学生事件との関わりの中で—

山本 禮子

一 はじめに

「昨日、私は神さまに祈って、私の命をこのように永くして、また、ほけないように神さまが私を守って、今日、先生方に会うようにして下さったことを感謝いたしました。」

日本語で訥々と話されるこの第一声で、丁重に迎えられた私たち一行は、淡いピンク色の正装したチマチヨゴリを召しになった金貞玉先生が、昨日以来、鶴首の想いをもって心待ちしていたらしかったことを痛感する。一九九九年三月二五日午後、ソウル市鍾路区清雲洞一番地碧山二―一二の高級マンションのご自宅への訪問であった。日本人である私たちのインタビュ―に備え、通訳として日本語の流暢な京城帝国大学英文科一九三九年卒業の梨花女子大学で同僚だったパンヨンク（龐溶九）先

生の同席を依頼しておいてくださった。

そもそも、金先生との出会いの端緒になったものは、三年前、現在の梨花女子高等学校の校長チュンク先生のご紹介・ご了解のもとに、日本植民地時代の梨花女子高等普通学校並びに梨花高等女学校卒業生の名簿を入手し、アンケート調査^②を実施した。その中で、さらに何人かの方にインタビュ―を申し入れ、今回、ご快諾いただいたお一人である。以下、金貞玉先生の敬称を略して、氏名だけで記述する。

二 金貞玉のプロフィール

アンケートおよびインタビュ―によって金貞玉の全貌をはじめに描写する。

一九二一年七月生れ、本年満八七歳である。出生地、京城府

唐珠洞一番地、梨花女子高等普通学校には二九年入学、三二年卒業、女学校入学時の保護者の欄に、両親とも死亡、その他の保護者として、叔母(母の妹にあたる)梨花女子大学総長金活蘭博士^③の名が記されている。一五歳まで父の仕事の關係等で北京に在住。しかし、七歳の時父と死別、その八年後、母と共に生まれ故郷ソウルの叔母の処に身を寄せる。その母も一七歳のとき病没。叔母がどんなに心強い存在であったかが推測できる。

幼少時からの北京での生活は、当然、日常用語は支那語^{マダ}であり、そのため、梨花普通学校編入に際し条件が付けられる。それは二年下げて五年に編入すること、それも日本語の平仮名・片仮名、ハングルを学習して一定の成績をおさめなければ退学するという条件であった。彼女は夢中に勉強した。その様子を、顔をほころばせて語る。

「私は、その時一五番になりました。だから生徒になれました。そんなに勉強したことを今も誇りです。」

アンケートには、印象に残っている教科として、歴史、英語、数学、理科、音楽にチェックが入っている。教師としては、誰もが尊敬した愛国者の朝鮮語と漢文の担当の金昶濟先生、ならびに担任の延世大学卒業の数学、物理・化学担当の鞠採表先生。日本人の先生で一番尊敬する先生は、現代国語の男の二階堂先生、哲学の造詣が深い方だと語る。また生徒全員が尊敬した古

文の平田先生は、教え方が真剣で、日本人としてのプライドが高かったが、醜くなかったと評価する。生徒の鑑識眼は鋭いものがあると思わせられる。そのほか、朝鮮語と裁縫の文仁順女先生や国語の大島先生の名前が挙がる。とくに、「大島先生は優しい先生で、家に呼んでおいしいものを食べながら、日本語の発音を教えて下さり、励ましてくださった。」と懐かしそうに語る。なお、アンケートの項目の「女学校在学中にあなたの生き方・考え方に影響を与えた事件」として光州学生事件、さらに「女学校生活全般を通して印象に残っていること」として、ふたたび光州学生事件と記していた。卒業後の進路として梨花専門学校、梨花専門助教を二年とのみ記す。インタビューその他の資料により、もう少し詳細にする。一九三六年から三八年北のピョンヤンの栗の多い農村に行く。その目的は住民に文字を教え、少しでも文盲の人に光をとの理念をもって、夜学では韓国の歴史を密かに教える教師であった。しかし続いて述べる在学中の光州学生事件との関わりがあり、ブラックリストに氏名が掲載されていて刑事にマークされ見つかる。「もう農村には来るな。ソウルから離れてはいけない、二時間以内に出ていかないと逮捕する。」といわれ梨花に戻ったという。「農村教育をしたかったが、村を出てきてしまったことを思うと心苦しい。農村で働き続けたかったという思いがあり、今でも気に

なっています。でもね、梨花にいったことはよかったと思っています。と。

著書『叔母 金活蘭』の執筆者としての履歴には、梨花女子専門学校文科卒業、米国ワシントン州立師範大学教育学部卒業、梨花女子大学大学院教育学部卒業、この間、教育心理学並びに韓国文化史を専攻する。なお、梨花女子大学で名誉文学博士の学位をとり米国南カリフォルニア州立大学東洋学部で韓国文化史講師を勤めたり、梨花女子大学の教授の傍ら、学生課長、韓国YWCA連合会理事をも兼任している。現在は、韓国YWCA連合会後援会理事長ならびに亡夫が校長として勤められた学校法人ドング学院理事長の要職にある。それらの活躍の中からアンケートの最後の「自分にとって女学校教育はどんな意味があったか」の質問の答えが出てくる。「二〇世紀に住んでいた韓国の女性教育に身心を全的に奉仕したと思っています」。続けて括弧を付け、一生を梨花大学で教授しましたと追記している。

三 光州学生事件の証言

(一) 主導者と煽動者

筆者は、まず、単刀直入に「今日伺いました第一の目的は、アンケートに書かれている光州学生事件の事です。」と切り

出した。「私は一二人の煽動者のひとりです。主動者は崔福順ひとりです。その下に煽動者二人がいました。わたしたち三人がこれを起こすようにしました。今は、みんな死んで私だけが生きています。」

生き証人として、私たちに語らなければならないことがあると直感させられる。

「光州学生事件を、私たちは光州学生万歳事件といいます。これについて『百年史』に書かれています。けれども主動者と二人のことはありません。

私は今日、ひとりのことを話します。私から聞いたことは、ほんとうに一三人の中のひとりでありますから、確かです。二人は煽動者です。生きている私が本当のことを言う、証言者になることは嬉しいです。」

金貞玉は、紙片に記憶している一三人中七人の名前を書き記す。

崔福順（主導者）、揚元淑 四B、郭福女 三B、金貞玉
二B、尹玉粉 三A、金鳳凱、尹福

(二) 事件の発端

「そもそも、光州学生万歳事件のきっかけは、汽車通学で朝鮮人と日本人と一緒にでした。その時、韓国女学生は長い髪を

結って垂らし、下を赤いリボンで結っていました。それを日本の中学生がひっぱたり、冷やかしたりしました。だから、朝鮮の男の学生が怒って、日本学生を打ちました、日本学生は一緒になって朝鮮学生を打ちました。駅で双方が争ったわけです。でもね、警察は、日本の学生には関わらなくて、朝鮮の学生たちを獄に送りました。学校に戻れない、このことが高等普通学生たちに分かりました。このような事件の状況が新聞で分かり、ソウルの高等普通学校の学生たちにも影響を与え、決起となったのです。

私たち一三人は一緒にみんなをけしたてました。崔福順は男の着物を着て、男の格好をして、何日何時、万歳一斉に叫ぶように、私たち二人は、梨花学校の学生たちみんなに連絡して、一緒に道に集まって万歳を叫ぶようにしました。でもね、そのときは一月三日(この日付は記憶違いと思われる。光州駅に向かう中学生一二名と高等普通学校生一〇名とが衝突し、光州事件として全国的に波及していった日である。梨花の学生の出陣式は一月一五日)です。はじめ、朝一〇時に万歳を叫ぶようにしたんです。男子より女子が中心になった動きです。そのうち警察が学校を囲んだから、私たち一三人は一緒になって一〇時にしないで九時に万歳を叫びましょう、と。みんな教室で靴を履いて待っていました。九時になって、私が一番先に「万

歳」と叫んで出ました。そして林敬愛が続いて「万歳」といつて飛び出しました。警察は、梨花と培材学校(キリスト教主義の男子校)の間の鉄条網を閉じて、出ていく人や万歳と叫ぶ人の着物に白墨でマークをします。私の後ろにもマークがありました。そして私が見たら、たくさんの人にマークがありました。そこで「注意しましょう。背中にマークしている」といいました。警察は私たちを梨花学校の教室に閉じこめ、鍵をかけました。その時、林敬愛が教室の窓ガラスを手で破り、外に出ました。彼女は学校の窓を割ったということで破壊罪で逮捕され、六ヶ月以上監獄に入っていました。私はその時二年生です。年齢に関係なく、二年生は監獄にいれないのです。三、四年は監獄にいれるのです。私は拘留所に二週間引っぱられました。それから梨花学校の寄宿舎に三ヶ月間監禁されました。終日、寄宿舎内におるようにしたのです。」

(三) 拷問

「でもね、拷問は同じでした。「首謀者は誰か？」それを聞くのです。「分かりません。私は日本語も分からない。支那から来たので、誰が誰だかも分かりません。」日本の警察は、尋問だけしました。答えをしなかったら、「馬鹿」といって、朝鮮人の刑事に私を任せます。その人は非常に怖いのです。朝鮮式

の体罰(4)をするのです。それは、指の間に棒を入れ指三本を締め付けるのです。刑事は「誰が首謀者か？」といって、私を跪かせ、「おまえ、早く答えろ」と。やかんの冷水を口に入れる。いわゆる、水拷問です。二、三度やって、私は気絶する。するとうつ伏せにして水を吐かせ、また水を入れるのです。私は、自分が拷問されるときは、あまり怖くない。殺すなら、殺せと思った。でも、三年生の拷問を、私が立見するようにする。その時、本当に怖いのです。二年生はそんなひどい拷問をしない。でも、三、四年生はほんとうにひどい拷問をするのです。崔福順は最後まで拷問されました。拘置所を出るとき、犬の鳴き声をしていました。精神異常になったのです。美人の金鳳凱は刑事に特別扱いされました。一二人は拷問されても何もいわなかったのです、その後、釈放されました。しかし三年以内にみんな死んだのです。」

語る金貞玉は、この間の想いを伝えるために、英語や韓国語、時に日本語によって表現しようとする懸命な姿に、聞く私たちも緊張する。ハーモニカで国歌を吹いた学生、西大門の警察署に女子学生を連行、収容し、男子学生は収容の余地がなく塀に向かつて立たせる。後ろ向きになった男子学生たちの場所で、彼女たちは拷問を受ける。「万歳」を叫ぶ学生に警官はホースで水をかける。極寒の中、それがどんなに大変なことか、想像

にあまりある。それでも「万歳」をいう学生を警官は鞭打つ。これらのことに対し日本の警察は直接に手を下さず、朝鮮の警官にさせていたことを、再三、金貞玉は語るのだった。

(四) 崔福順の功績

おもむろに、しかし情熱を込めて口を開く金貞玉は、再度、「主導者は崔福順、一二人は煽動者です。林敬愛は破壊罪で逮捕され半年、牢獄にいたために、解放後、国と梨花学校の両方から賞をもらいました。林さんだけが賞をもらったのはおかしいと思います。一番ほめられるべき人は崔福順です。」

韓国では当時の学生パワーのことを知らない。政府が意図的に隠しているとも思えるし、記録を破壊しているとも考えられます。このことを韓国で発表したが無視されたので、日本で発表して欲しいと願っています。」

光州学生万歳事件の生き証人として、一つのことを語りたいたと、神に祈りつつその時を待つ金貞玉の想いは、ただ、崔福順の功績を公に認め、顕彰することにあつたのである。

四 『梨花百年史』に見る光州学生事件(第一期)

梨花女子高校の学校史(5)に記載されている関連記事を、翻訳して一瞥する。

「一九二九年に韓国の学生運動において大きな足跡を残した光州学生運動が起こり、梨花の幹部クラスの学生たちは屋根裏部屋に集まって、光州学生事件擁護同盟中央本部を組織し、大極旗千枚とプラカード六〇枚、多数の宣伝ビラを作つて十一月五日を梨花の学生の出陣式と定めた。その日、梨花女子高等普通学校の学生四〇〇人あまりは、黒い運動靴を最初の授業時間から履き、授業が終わつた鐘の音と同時に校庭に集合した。各自は大極旗を手に持ち、あるいはプラカードを高く掲げ、ビラをもつた学生は、二人で組織された煽動隊の指揮に従つて一斉に万歳を唱えた。」

金貞玉証言と符合してみると、日付は、先に記したように金貞玉の記憶違いであろうと思われるが、確かに一九二九年一月一五日である。また生徒たちは煽動者の指示に従つて、はじめから黒い運動靴を履き、校庭に出る用意をしている。しかし、煽動隊一二名とあり、主導者が抜けてしまつたか。あるいは、主導者も煽動者の役割を果たしたとしてその中に組み込み、二年生であつた金貞玉が抜けてしまつたのか、その点は判然としない。

当時の事情を教師だつたソ・ミョンハクは次のように回顧している。

「その時、屋根裏部屋は使えないようになっていたんです。

ところが、学生たちが数人、出入りしているようだったので、ひとりの学生をつかまえて尋ねてみると、会長室に行くといふのです。一階には会長室はありません。おかしいと思つていましたが、次の日の朝、教室をのぞいてみたら、全員が室外で履く黒い運動靴を履いていました。室内では白い運動靴を履くように定められていたにもかかわらずです。学生たちが何かをしようとしているのだと思いましたが、鐘の音が聞こえると急に外に走つて出ていきました。……」

四〇〇人の仲間の生徒に同じ行動をとらせるとなると、主導者と複数のそれを補佐する人材を必要とするであろうことは容易に想像できる。

「それにペジェの学生六七〇人が呼応し、両校の学生が群をなして街に出ていこうとしたとき、西大門警察署が出勤し、デモを阻止する一方、主導者五四人を連行した。学校は一六日から休校となり、チャーチ校長は西大門署の高等係主任、黒沼を訪問し、キム・マリア他五三人のの釈放を嘆願したが、聞き入れてもらえなかつた。梨花学生の万歳運動は瞬間に市内の他の学校に普及し、一七日にはペファ、チョンシンなど、多くの学校が休校となつた。その後、総督府の学務局は休校令を出し、抵抗運動を阻止しようとしたが、ソウルの学生運動はさらに激しく拡散し、一二月のはじめから一〇日間

で千人が検挙される事態となった。そのころ、梨花では新しい幹部クラスの学生たちが夜になると屋根裏部屋に集まり、第二の万歳運動を計画していた。」

ここで指摘する第二の万歳運動を計画していた新しい幹部クラスの学生とは誰を指すか、という疑問がわく。金貞玉の証言によると、一月一五日の運動の主導者と煽動者「一二人は拷問されても何もいわなかったので、その後、釈放され」たと述べている。それがいつの時点だか判然としないが、拘置所に二週間、寄宿舎での三ヶ月の監禁生活を送る金貞玉の耳に当然入っていると考えられる。新しい幹部クラスには、先の主導者崔福順はじめ煽動者たち（必ずしも全員とは断定できないが）をも含んでいたのではなからうか。祖国存亡の危機として、若き同士の結束が図られていったであろうことは想像に難くない。

五 「光州抗日学生事件資料」との照合

韓国某大学研究者の研究室にあった光州学生事件に関する貴重な資料を、好意によってコピーし、入手することができた。それは朝鮮総督府政務局極秘文書『光州抗日学生事件資料』としてまとめられているものであり、朝鮮総督府学務局長より兎玉政務総監宛報告書および各道知事宛通牒としての事件の概要のほか、概要および状況摘録「光州学生事件及影響其の一、其

の二、其の三」、「光州、京城に於ける学生事件の裏面並学生秘密結社及其の系統」ならびに「秘密結社朝鮮共産党事件」が収録されている。なお、巻頭に姜在彦の解説がある。

凡例に記してある必要事項を要約して記載する。^(?)

「1 本書は、光州学生事件に関して朝鮮総督府警務局が克明に調査した極秘資料を中心に編集したものであるが、「秘密結社朝鮮共産党事件」のみは調査機関、出所も不明である。しかし、同系統の調査によるものと思われるので、ここに収録することとした。それぞれの資料にはいずれも㊟の印が捺されている。

2 「光州中学校生徒対光州高等普通学校生徒争闘事件の概要」および「秘密結社朝鮮共産党事件」は罫紙に複写紙を入れて鉄筆で複写したもの、「学生事件裏面系統図」はオフセット印刷、他はタイプ印刷および謄写版印刷である。

3 旧漢字は簡略体を用いたが、人名は原文のまま、原則として平仮名に統一、なお、句読点・濁点は便宜上これを附した。」

筆者は、光州学生事件の資料として、本資料は利用価値のあるものと判定している。なかでも、状況を詳細に収録している「光州学生事件及其の影響」を中心に、他の記録と合わせながら、事件の概要と梨花女子高等普通学校関係に焦点を当てて見

ていく。

第一期の事件は、二九年一〇月三〇日の朝鮮女生徒と日本人中学生との接触から、十一月三日、明治節の日に中学生一二名と高等普通学校生一〇名の衝突に端を發した朝鮮人学生の動きが、光州学生運動に連帶するソウルの学生運動へと拡大していった一二月までを指す。この時期について、梨花女子高等普通学校関連の記事は、他校に比し些少である。わずか、波及状況の記録の中に「一二月九日、私立梨花女高普校内に於いて一斉に万歳を高唱し喧躁す」との記事がある。また「事件及其の影響」には、京城府内二七の学校の動揺状況を表で示し、私立梨花女高普の欄に、一二月九日「昼休盟休を謀議」、一一日「本日より臨時休校」とのみ記載してある。さらに、「一二月一一日、京城府内朝鮮人各中等学校生徒の動揺」として「前日来動揺の各校は本日も依然動揺を続け怠業状況にありたるも、特に不穩の行動に出でたる者なく、連日の状況に鑑み、徽文、普成、敬新、協成実業及び淑明、進明、梨花、同徳の各私立学校は本日より当分休校する旨發表し、夫々生徒父兄に通告せり。尚京畿道に於て去る九日以来檢束せる学生に対し九日夜、四百四十二名を釈放したるが、更に昨十日深更四百一名を釈放し、引続き檢束中の者二百十一名なり。」との記事に梨花の学校名が掲載されている。

しかし、解説者姜在彦は一九二九年一二月の動きを次のように記す。「光州学生運動は、朝鮮語新聞に対する厳しい報道管制と檢閲による記事削除にも関わらず、ソウル各団体の調査団が派遣されて、その真相が次第に全国的に知れわたるようになった。：光州学生運動に連帶するソウルの学生運動は、培材高普からのろしがあがった。従来校務主任の交代を要求した培材高普の三、四年生は一月一五日から同盟休学に突入し、養正高普でもこれに同調する動きをみせた¹⁰⁾。このことから、培材高普と隣接している梨花女高普で動きがあつたことは領けるのではないだろうか。さらに、解説では「従来基本的には全羅南道に限られていた光州学生運動は、日本警察を中心とした消防隊、青年団、在郷軍人会などによる集中的打撃を受けた。ところが一二月に入って、運動の中心舞台はソウルに移り、一部は地方都市に波及していった¹¹⁾。」と記していることから、ソウルの各学校での動きがあつたと判断できる。また、筆者は、梨花が早々に休校の措置をとつていふことから、二週間前の一月一五日の事件が発生していたと推測する。ただ「梨花百年史」では、すでに「光州学生事件擁護同盟中央本部」を組織していることを記述しているので、あまりの対応の早さに少々疑念を持つと共にこの動きは、一二月にずれ込んだ可能性もある。いずれにせよ、京城府内の朝鮮人中等学校に、光州事件に関

わった高普生へ連帯するための盟休等の動きと共に、植民地教育の問題点を指摘した檄文を撤布する行動が激しくなつていたのであった。

六 もう一つの資料

このあたりの状況を裏付けるものとして間接的な表現ではあるが、雑誌『文教の朝鮮』を挙げる事ができる。それは一九三〇年二月発行のもので、彙報に同年一月一三、一四日の道知事会議における朝鮮総督訓辞を掲載する。その中で思想問題に触れる。「…今や疆内概ね静謐なりと雖接壤地方の政局の転変に伴ひ疆外より匪賊の侵入を見るやも測り難く又輓近不穩の思想を抱き国家社会存立の基礎を危うくせんとするもの漸く多からんとするを以て各位は宜しく当該官憲を督励し之が警防取締を厳にし不良の輩をして蠢動の余地なからしむると共に不穩なる思想運動の根絶に全力を尽さんことを期すべし」。続いて指示として学務局および警務局の主管からの指示がある。

「学務局主管 七 学生生徒児童の訓育に関する件

近時学生生徒児童中往往志操堅実を欠き不穩なる思想に惑溺して貴重なる勉学の途を誤る者あるは真に憂慮すべきことなり此の点に関しては数次指示するところあり各位に於いても夫夫留意せられつつあることと信ずるも今後一層部下職員を

督励し校風の作興校規の振肅を図り教導感化の実を挙げ以て学生生徒児童の思想を善導し其の帰趨を誤らしめざるやう勤めらるべし」

「警務局主管 一三 学生運動の取締に関する件

最近激増せる疆内各種学校の盟休事件は昭和二年以降殆ど共通的に民族主義的及共產主義的傾向を帯び来り其の実行方法も最初より計画的組織的に行はれ単なる年少学徒の行動とのみ見るべからざるものあり殊に昨年十一月全羅南道に於て勃発せる所謂光州学生事件竝に之に関連して起りたる不穩行動及京城・平壤・咸興・春川・東萊等の各地に於ける公私立中等学校生徒の動揺盟休等に就き其の状況を仔細に觀察するに其の運動手段方法等より見るも決して学生の創意に非ざるべく必ずや裏面に策動の深き根源あるものと認め所轄道に於て捜査の歩を進めたる結果光州・京城に於ける事件は国際共産党の学生指事方針に基き朝鮮に於ける共産主義者等が各学校の子女に糾合煽動して秘密結社を組織し預て主義の教養に努めつつありたるものにして偶今回の事件発生を機とし之を利用して不穩なる事態を惹起こせしめんとして画策せられたるものなること判明せり蓋し純真にして春秋に富む学生を駆つて主義運動の渦中に投じ或は之を使噓教唆して不穩行動に出でしめ其の前途を誤らしむるは寔に寒心に堪へざる次第なれ

ば各位は平素一般学生思想・言動・主義及思想団体との交遊連絡等に関しては深甚の注意を払ひ苟も事案発生するに於ては極力裏面策動の本源を究め之が禍根を芟除し以て青年学生徒の将来を誤らしめざるやう努めらるべし^②」

以上の資料により、前年の十一月及び十二月の光州学生事件に関連する学生の動きが、光州からソウルへと中心舞台を移すという軽視すべからざるものがあつたことを裏書きしている。このことから推量して、梨花女普高の動きを語る証言者金貞玉の言辞の正当性が証左され、『梨花百年史』の十一月一五日の記録もより確かなものであると判断できる。

姜在彦は解説の中で、「このように光州学生運動は、其の中心舞台が十一月の光州から、一二月のソウルに移り、公然または非公然、社会主義または民族主義的諸団体との結合によつて、民族運動全般への発展を志向したが、日本官憲の先制的弾圧によつてそれは十分に実ることができなかった。しかし同盟休校と冬季休暇によつて帰郷した生徒たちによつて、新聞紙上では厳しい検閲のために断片的にしか知りえなかつた光州学生事件の真相が各地に伝わるにしたがつて、運動の火種は朝鮮の津々浦々にひろがる結果となつた。」と綴っている。

七 光州学生事件第二期

(一) 梨花女子高等普通学校生徒の抵抗運動

『梨花百年史』によつて、年が明け学校が始業した頃の状況を捉えてみよう。

「一九三〇年一月一五日、全校生が運動場に集まつて万歳を叫び、プラカードを持ってスローガンを叫びながら校外に出て行こうとしたが、警察に止められ、校外に出られなかつた。そしてプラカード六〇枚を取り上げられ、主導者が逮捕された。また、主導者の搜索に非協力的だつたソ、グアンジン先生が一七日に検挙され、一八日に新たに梨花の学生一七人が検挙され、合わせて五七人の被検挙者のうち、一五人は放免され、四二人は引き続き調べを受けていた。一六日から二〇日までを休校としたが、事態が収拾されなかつたため休校はさらに一ヶ月延長された。一八日、学校側はチェ・ボクソン、イム・ギヨンエ、アン・イムスン、ナム・ドックンなど一二人を退学させ、ヤン・ユンスク、キム・ジニョン、チェ・ユンスクなど数人を無期停学とすることで事態の収拾を図ろうとした。しかし、学生運動はさらに広がり、ソウル市内の三〇校でもそれに賛同した一万二千人が抵抗運動に出るといふ結果となつた。女学校としては梨花、ペファ、スン

ミヨン、ジンミヨン、チョンシン、ヨサン、トンドク、クンファ、実践女子美術など九校が参加し、男子校としてはベジエ、ヤンジョン、ポソン、第一普高など一六校が、さらに専門学校六校が参加した。」

一月一五日の梨花女子高等普通学校の動きを状況摘録ではつぎのように記す。¹³⁾

「京城私立梨花女子高普生は始業と同時に喧躁し、二尺四方の白布に「学校警察侵入反対」「植民地教育警察全廃」「光州学生事件に対し憤慨」等墨書せる大旗並旧韓国旗及赤布又は白紙に「無産階級開放^{アヤ}万歳」「被^{アヤ}压迫民革命万歳」等と記載したる小旗を各自振翳し喊声を揚げて校外に脱出せむとしたりを以て教師一名生徒五〇名を検束す。」

また事件及び其の影響（其の二）でも京城府内私立学校動揺状況として梨花女子高等普通学校の欄に、不穏行動参加生徒数約六〇〇名、不穏行動として「第一時間目授業中、三年の動揺と共に全校生徒校庭に集合、白木綿製旗に「学校警察侵入反対、光州学生事件に対し憤慨、学生犠牲者全部釈放」等数項目の不穏字句を記入せるもの及赤旗、旧韓国旗紙製小旗多数を翳して喧躁、万歳を高唱し、隣接培材高普生徒を誘引せんとして阻止されたる為、警戒員に悪罵、反抗的態度に出で窓硝子を破壊する等の暴行に出でしを以て首謀者生徒五十名、教師一名を検束、

鎮静せしむ¹⁴⁾。」と記載する。この日から三日間で京城市内の私立学校二二校、生徒数約五千名がこれらの動きに加わったと思われる。検束者数は四一〇名を上回っている。梨花女普高は一六日休校としたのであった。

（二） 処分の状況と解放後の顕彰

「梨花百年史」には、「この運動に同調して参加した学校の総数は、全国で一九四校で、参加学生は五万四千人を数え、これによって退学処分を受けた学生は五八二人、無期停学が二三三〇人、そのうち送検された学生は一二〇五人にもほった。」と記載している。

なお、学内関係者の情報としてつぎのように述べる。

「一月三十一日、チェ・ポクスンら一人が検事局に送検された。三月一九日には初公判が京城裁判所で開かれ、二〇日に求刑が出され、二三日に刑が言い渡された。チェ・ポクスン、キム・ジニョン、チェ・ユンスク、イム・ギョンエは懲役刑を受け、ハム・ドクン、キム・ポンニム、チェ・ヒヨンス、ヤン・ユンスク、アン・イムスン、イ・オンニョンは執行猶予で釈放された。彼女たちの裁判にはイ・イン（李仁）、ホ・ホン（許憲）、ヤン・ユンシク弁護士¹⁵⁾の無料弁護と、減刑を陳情したソン・ジヌ東亜日報社長の力が大きかった。こ

の事件に関連してクヌ会(権友会)のホ・ジョンスク、ヨサンのソン・ゲウォルも懲役判決を受けた。

梨花学生の屋根裏部屋での秘密集会を可能にした隠れた愛国者として、当時の教師、ソ・グアンジン、ソ・ミョンハクその他に当時の寄宿舎の舎監、パク・キヨンスク(朴敬淑)を挙げる事ができる。パク・キヨンスクは一九二九年一月の集会和、それ以降続けられた秘密集会を密かに知っていたにもかかわらず、学生たちを保護し、秘密を漏らさなかった。一方、梨花で何か事件が起こりそうになるたびに西大門警察署では予備検束を行った。」

愛国者としての彼女らの真情に想いを馳せながら、梨花女子高等学校はつぎのような措置を執っている。

「解放後、この運動で退学、除籍された愛国学生たちは、一九四五年と一九五〇年の二回にわたって学校から卒業証書を授与された。」

(三) 崔福順等が影響を受けた権友会

光州学生事件に関し、梨花女子普通高等学校内での首謀者であった崔福順は、「事件資料」の中で三回登場してくる。これを追いながら、彼女の行動ならびに人柄を描写してみよう。

そもそも、権友会は新幹会の女性団体として構成されていた

ものであった。新幹会は朝鮮全土にわたる民族単一党であり、「民族運動の火蓋を切るに於いては、其の及ぶ処予測し難きものあり、事態容易なきものと認め¹⁵」られるような活動をする団体として存在する。中央執行委員長が許憲であり、その妻許貞淑が権友会の幹部である。この会の動きを、「京城に在りては新幹会の姉妹団体たる権友会(女性団体)は客年来、私かに首領者等会合、女学校生徒に対する煽動方法に関する協議を完了し新学期と共に活動を始めたる為め京城府内各私立女学校は殆ど一斉に動揺するに至れり¹⁶。」と掌握している。それによると、女学生側の無関心状態を遺憾とし、その対策を協議する。一九二九年一月九日の夜更け、家庭の事情、警戒の嚴重なため目的達成困難として不賛成者のいる中で、梨花女子高普代表の崔福順の三名のみが許貞淑等のもとに集っている。各女学校への連絡の役割を、卒業間近で運動参加に不賛成の意志表示の者もあつたという。冬季休業中でもありこの時はそのまま終わるが、年が明け新学期開始後の一月一三日、裏面行動を開始し梨花女高普四年生崔福順、崔允淑、金鎮賢の三名が主として奔走し、各学校に連絡をとり一月一四日夜、具体的協議をしたことを記録している。「謀議の上、一月二五日午前九時三十分を期して各学校一斉に校外に出で鍾路通りに於て万歳を高唱すること、警察官に対しては故意に反抗して其の憤怒を激成せしめ殊更に

過酷なる取扱を為さしむべく誘導し、以て一般民衆の同情と昂奮とに依りて一大民衆運動を誘発し、且つ検束されたる際は留置場に於て同盟断食し与論を喚起せしむること、等協議決定し、且つ謀議の内容は絶対秘密を厳守すること及万難を排して校外に脱出し指定場所に集合、示威運動を執行することを強調し、細部の行動に関しては各校代表に於て機宜の計画により実行すること」としている。

この会合に男子校からも参加があり、連携を図つたと「事件資料」は記録する。これが十五日の運動となって展開された。

一月三十日「保安法並びに治安維持法違反として関係被疑者九十一名中三十四名に対し有罪意見を附し所轄京城地方法院検事に送検」したのであった。

この資料はあくまでも日本側警務局によるものであるが、その文言の中に他の女学生が打算的に考え行動する中で、崔福順、崔允淑、金鎮賢の三名の女子青年としての純粹な真情から湧き出る行動が伝わってくる。

八 光州学生事件第三期

二月以降の学生の動向を三月一日の騒擾事件記念日に向けての学生の一大抵抗運動に発展することをおそれる日本側警察は、周到な体制をとる。二月以降の暴動発生事件の概況を伝えなが

ら、多少の動揺はあるが、「概ね平靜に経過し学生事件も今や終息の観あり」と概況をまとめる。それは、あちこちに発生する学生の動きを権力で押さえ込んだ結果であることは当然である。梨花女子普高においてはこの時期の表面的動きは皆無であった。

九 同時代に生きた梨花の女学生

一九九六年三月、梨花女子高等学校を訪問した際、校長チュング先生から三・一事件に関連して毎月三一日ならぬ一三日に同窓会を開いている学年のあることを聞き、ご紹介を頂く。その方々にインタビューするため同年九月一二日から三日間、福田須美子と共に訪韓した。一三日午前、梨花女子高等学校の教師の案内でスイスホテル・ソウルに行く。梨花の卒業生の方々の丁寧な出迎えを受け、早速、バイキング方式の昼食を頂く。その後、話し合いの席に着く。そこで彼女たちから一九三一年の卒業であり、それを覚えて毎月一三日に会合を持っていることを知らされた。日本語の達者な方の通訳により、それぞれの話を聞く。その中で、小柄な白いチマチョゴリを召された女性から、光州学生事件について謝罪をしろとの要求があった。片手を揚げ拳を握って叫ぶ姿に、少々圧倒されながら、つぎのような意味のことを、私は申し上げた。「いまここでわたしは、

「ごめんなさい」とただ頭を下げることはしない。それでことが済むとは思っていない。私たちはかつての植民地時代の中等教育の実態を捉え、その作業を通して、当時の日本の教育問題を抉出したい。ここで謝罪しないことを了解してほしい。」と。私は、私たち高等女学校研究会プロジェクトチームの仕事とその目的を知っていただきたいと思つたのである。

同期の人々にとって、光州学生事件に関する想いは、強弱の差こそあれ、脳裏に焼き付いている情景であり、行動であつた。それがアンケートの中に反映しているので、抽出してみよう。^①

「一九二九年、光州学生事件があつた朝、運動場に出て万歳を唱える学生たちを警官が教室に追い入れて、問題学生を呼んで警察へ連れて行くということがあつた。長井先生が心配そうなお顔で「お入りなさい。騒がないことよ」と慰勞してくれた優しい姿がいつもうかんできます」「基督教教育のため、愛国の念強く、信仰生活の基礎を築きあげる原動力になり、八四歳の老後にも関わらず、強靱な精神と奉仕生活に忠実に励むことができる、女学校・梨花に対して感謝する」「先生方は皆韓国の独立を望む方々でした。光州学生事件の時、先生は学生たちを助けてくれました」「私たちの学校では先生たちがみんな愛国心が強く、私たちもそれを受けて、私たちの間では日本語を使いませんでした」「光州学生事件」「光州学生事件の時、謀

議に参加したが、さいわいにつかまらなかった。だがその時、排日精神、民族精神が定着した」「学生たちは民族精神が強く三・一運動の時はリュ・カンスユン女学生が刑務所でなくなり(反日運動)、光州学生運動の時は、梨花の女学生が主動になった。その時、金活蘭のような社会人士がたくさんいた」「光州学生事件、影響を与えた人物はイム・ギョエさん(この人は金貞玉の話の中で名前が出ている)」

通訳をした方は、「光州事件の時、聖書担当の徐先生と一緒に警察に呼ばれた。その時、先生が日本の刑事に殴られたことが忘れられない」と記す。さらにこのホテルでの出会いの場に林敬愛が出席し、先に記した拳を挙げて謝罪を求めた方であつたことを、この論文を書くに当たってはじめて確認し、金貞玉が指摘した人と同一人物であることを発見したのであつた。彼女のアンケートには「ハワイに住んでいた叔母の紹介で梨花に入学したこと、教育内容は充実していて、日本の先生を除いて先生方は愛国心が強かつたこと、その先生方が反日精神、愛国心を起こして下さつたこと」さらに「光州学生運動の時、警察と刑務所で学生たちを励ましながら、反日精神を強くしたこと」を記す。続けて、「高等学校の教育を通して世界をよく知るようになって、政治にも少し目を開くようになった。思春期だったので、感受性も理解力も高かつた。自分の国のため何か

をしなければならぬと考へた。自分の人生の中で一番重要な時期だつたと思う。希望も理想もあつた。何でも出来ると自信に溢れていた」と綴る文面とあのホテルでの邂逅の時の状況と、お姿とを重ね合わせながら、出来ればもう一度お目にかかりたいと願つてゐる。

事件に遭遇した世代は、自分自身で時代の荒波を生きただけに強さと自分なりの判断力を形成していると痛感する。

十 崔福順等の顕彰の件

金貞玉の回顧談と『梨花百年史』、さらに朝鮮総督府警務局極秘文書としてまとめられている『光州抗日学生事件資料』を綜合して考察しながら、つぎのように筆者なりの見解を出し、批判を受けたいと思う。

金貞玉の回顧談の中心になつてゐるものは、確かに光州学生万歳事件として、全国的に波及していく第一期のしかもごく当初のものである。これは『梨花百年史』では明瞭に表現されてゐる。しかし、『事件資料』では梨花女普高の動静について殆んどふれてゐない。

第二期の新学期開始後、運動の全国的拡大となり、一月八日の開校と共に、あちこちの学校での学生の白紙同盟、街頭示威、登校拒否が続く。先に記したように、梨花女高普の崔福順、崔

允淑、金鎮賢は他の学校の人々と共に、権友会幹部の指示により街頭示威に参加し、一月十五日の梨花女高普の不穩行動に発展する。

ここで金貞玉が偉大な人物として認めて欲しいと願つてゐる崔福順の動静について考察する。

一九二九年一月十五日、釈放された彼女は、ひどい拷問をうけ一時精神異常を來したかと思われるが、まもなく回復し、年内および年明けにはふたたび学生運動を担う重要な役割を果たしてゐることが、『事件資料』で明瞭である。そのため、再度検挙され、『梨花百年史』に記述されてゐるように、一月十八日学校側は彼女を退学させる。さらに一月三十一日、検事局に送検され、三月一九日初公判、二〇日求刑、二三日懲役判決を受けた。どのような最期を迎えたかは定かではないが、高い理想に燃えた女子青年がその生涯を燃え尽きるほどに捧げ尽くしたことに畏敬の念を持つ。一方、金貞玉は、三ヶ月間の寄宿舎での監禁生活の身となり、釈放された崔福順とその後、直接相まみえることはなかつたのではあるまいか。しかし、彼女は再び運動の渦中に身を置き、自己のすべてを捧げたであろう。地上での生涯は、或いは實質的に短期間だったかもしれないが、活動できたことは本人にとっては本望だったのであろう。朝鮮解放の礎の一つである。ともあれ、金貞玉が切望するように、崔

福順はじめ光州学生運動に関わり若き命を投じた梨花女子高等普通学校に在籍したことのある人物を顕彰することは、梨花にとってひいては韓国にとって望ましいことと信じる。梨花の卒業生名簿に一九二七、二八、二九、三〇年がないことに寂寥の感を持つ。少なくとも崔福順、崔允淑、金鎮賢は三〇年卒業になるべき在籍者であったのではなからうか。金貞玉が記した四年生の揚元淑も卒業を控えていた一人である。

一粒の麦が地に落ちてたたくさんの実を結び、その実がまた多くの実となることを念願して設立された梨花学堂における創立の理念を、本当に生きた生徒や教師があつたことはすばらしい歴史であると考え。また、植民地下における学生運動は、女性の自立・解放の一端をも担つたと考える。

当時の学生運動の特徴は、学校教育における植民地的教育政策との対決にはじまって、それらを大きくは反帝的、民族および階級闘争に結びていく志向であり、今日の国際社会にあっては、十分納得できるものである。記録の冒頭に書いた姜在彦の解説の最後に、「一九二九年一〇月三〇日、朝鮮人生徒と日本人生徒との些細なトラブルから始まった光州学生運動は、ほぼ四ヶ月間に国際的ひろがりをもって進展した。この過程の中で先導的役割を果たした学生運動は、日本警察の機先を制した検挙と監視とによって、一般民衆運動と結合し得なかつた欠陥は

ありながら、朝鮮における植民地教育政策への反対意志を行動をもって示し、反帝民族解放運動の重要な一環として大きな意義を持つものである。」^(註)と評価している。

ある意味では、梨花学校の寄宿舎に監禁された金貞玉は、再び学生運動に関わる機会を逸したともいえよう。しかし、すべては神のみ手の中にあつたとしかしいようがない。良き師、良き友との交流も彼女を豊かにさせた、また彼女との関わりの中で多くの人が恵まれたことであらう。

崔福順はじめ学生運動を煽動した者は、たとえ、思想的問題が当時あつたとしても顕彰に値する人々である。また金貞玉のように光州事件の端緒のみの関わりしかもちえなかつた者もそれに該当すると考える。小論を措筆するにあたり、植民地下にあつた韓国・朝鮮の学生・生徒に想いを馳せ、罪責の念を強くすると共に、民族の独立と人権の擁護の重要性を痛感する。

(註)

(1) 山本禮子と共に、福田須美子(相模女子大学教授)、太田孝子(岐阜大学留学生センター助教)がインタビューを主とする今回の韓国訪問に参加。なお、福田の知人金珠榮に通訊案内員として同行を依頼する。

- (2) 一九九六年実施のアンケートは次の資料に収録『戦前の女子中等教育の研究―高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料No.6 (韓国的女子高等普通学校・高等女学校の分)』一九九九、三
- (3) 金貞玉著『叔母金活蘭』一九七七、四 再版一九九八、一一、二〇
- (4) 金貞玉は朝鮮式体罰というが、この方法は第二次大戦中において日本の軍隊が中国人にも適用していることが野田正彰『戦争と罪責』にも記されている。
- (5) 『梨花百年史』梨花女子高等学校一九九四、五
- (6) 朝鮮総督府警務局極秘文書『光州抗日学生事件資料』は、冒頭で十七頁にわたって解説を執筆している姜在彦が、五種の極秘文書資料をまとめ、風媒社から刊行した物で刊行年月は未詳。筆者の手元にあるのはそれをコピーしたものである。
- (7) (6) 姜・解説 二二頁
- (8) (6) 状況摘録 六七頁
- (9) (6) 影響其の一 一四〇～一四五頁
- (10) (6) 姜・解説 二九頁
- (11) (6) 姜・解説 三〇頁
- (12) 『文教の朝鮮』第五四号 一九〇～二四頁(昭和五年二月一日発行)朝鮮教育会 復刻『文教の朝鮮』第三二卷エムティ出版一九九六、一一
- (13) (6) 状況摘録 七四頁
- (14) (6) 影響 其の二 一七三頁
- (15) (6) 系統 三六六頁
- (16) (6) 影響 其の二 二〇八～二二二頁
- (17) (2) の『調査資料』中に収録
- (18) (6) 姜・解説 三八～三九頁
- なお、解説者姜在彦氏は、現在、京都・花園大学の教授である。附記して感謝の意を表したい。
- (人文学部英文学科教授)